『草枕』と『杜子春』

Junko Higasa

まず夏目漱石作『草枕』にこんな一節がある。『憐れは神の知らぬ情で、しかも神に尤も近き人間の情である。御那美さんの表情のうちにはこの憐れの念が少しもあらわれておらぬ。そこが物足らぬのである。ある咄嗟の衝動で、この情があの女の眉宇にひらめいた瞬時に、わが画は成就するであろう』―この成就は小説の最後で那美さんが戦地に行く元亭主と予期せずに顔を合わせた咄嗟の場面で成された。そしてこの文章の前半にはパスカルの『思考（パンセ)』が込められている。宇宙という尊厳の中にはない「人間という思考する生物」特有の「憐れ」という情は、世俗の同情とは違う最も純粋な観念である。逆に言えばそれがあるから人間なのである。

その人間らしさを持った時の精神の浄化を著したのが、芥川龍之介の『杜子春』ではないかと思う。その第一章にこんな文がある。『日は暮れるし、腹は減るし、その上もうどこへ行っても、泊めてくれる所はなさそうだし―こんな思いをして生きているくらいなら、いっそ川へでも身を投げて、死んでしまったほうがましかもしれない』これは財産を使い果たして日々の暮らしに困る元金持ち息子の嘆きであるが、この言葉はオフィーリア、ひいては「近々身を投げるかもしれません」という那美さんに通じる。その背景には「現世のどこへ越しても住みにくい」という言葉さえ浮かぶ。

『杜子春』では、彼が上記のように世をはかなんでいると、仙人が出てきて金をもたらす。彼はその金を湯水のごとく使い果たすことを二度繰り返す。三度目に仙人が出てきたとき、金のある時には寄って来て金がなくなると自分には見向きもしない世間の人たちの不人情に嫌気がさした杜子春は、金を断り仙人の弟子に志願する。その登用試験は何があっても口を利かないこと。そして彼は閻魔大王の地獄の責め苦にも無言で耐える。だが亡くなっている両親が引き連れてこられて責められたとき、母親の声が聞えた。『心配おしでない。私たちはどうなっても、お前さえ仕合わせになれるのなら、それより結構なことはないのだからね。大王が何とおっしゃっても、言いたくないことは黙っておいで』恨む気色もないその言葉に、杜子春は世間の人と違う母の無私の愛をありがたく思い、ついに「お母さん」と言葉を発してしまう。もちろん仙人にはなれない。けれどむしろその温かい情が自分から出たことに杜子春は満足した。仙人も、もしあの状況で杜子春が黙っていたら彼を殺してしまおうと考えていた。杜子春は仙人に言う。『何になっても、人間らしい、正直な暮らしをするつもりです』そして仙人はそれを悟った杜子春に「周りに桃の花が一面に咲いている家」即ち桃源郷を与えて去る。この杜子春の情が『草枕』の那美さんには足りなかった部分だ。そして女としてか、人間としてか、死んでしまうかもしれない元亭主に対する心からの情の一滴が波紋のように満面に広がった時、那美さんの心は桃源郷に入る。今まで不人情と非人情の間で統一されなかった表情が統一され、画工の求める非人情の中の究極の美―パスカルのいう人間が人間たる所以の真の人情が成就する。杜子春の究極の咄嗟に現れた情は、那美さんの咄嗟―即ち世俗を超えて無意識の世界に入った時に現れた。そこに在るのが「真実の憐れ―人間の情愛」である。それが現れた時、那美さんは杜子春同様に心が解放されて、ようやく人間らしくなれたのである。 (2013.9.22)